



「気象予報のための 風の基礎知識」

山岸米二郎 著

オーム社出版局,

2002年2月20日発行, 189頁

定価2800円(本体価格)

ISBN4-274-02468-7

書名から判断すると、気象予報士向けの気象学の入門書のような印象を受けるが、実は、かなり高度な内容である。著者は本書の意図をまえがきで次のように述べている。「この本は気象を体系的に解説するのが目的でない。…現象の事例をたくさん提供して(既に出版されている)教科書の典型例と現実の気象との距離を縮め、身の回りの天気推移に一層興味をもっていただけたら幸いと考えて本書を計画した。したがって理論的な説明は割愛し、解析事例や観測データを多く示すことにした。」

本書の特徴を一言でまとめると、マニアックでスタイリッシュな本ということになる。大学院で気象学を学ぶ場合、講義とセミナーがある。講義では知識を体系的に学ぶ。気象学は、多くの観測事例に共通する本質が抽出されて学問体系が組み立てられているわけだから、概念的にならざるを得ない。それに対して、セミナーでは、気象を深く理解することが目的である。そのために、特定のテーマに関する論文を読んだり、大学院学生が行っている研究紹介が行われる。本書を読んでいると、講義というよりは、大学院のセミナーを聴講している、という気分になった。この意味でマニアックな内容なのである。

スタイリッシュとは、本書の構成を指す。全体が春夏秋冬に4分割され、それぞれの季節が、さらに4分割される。計16テーマについて、セミナーが展開される。16のテーマをどのように選ぶか、悩ましいところであるが、著者の選択は以下の通りである。

- 春：1) 春一番とフェーン 2) 東北山林火災
3) フェーンとボラ 4) 前線の通過と関東地方の地形
- 夏：1) やませ 2) だし
3) 海陸風 4) 汚染質の中距離輸送
- 秋：1) 台風と高潮 2) 竜巻

- 3) 肱川あらしとまつぼり風 4) 北東気流
冬：1) 寒気内低気圧 2) 富山県の冬季の南風
3) 空っ風 4) ヒートアイランド

春夏秋冬の扉には、その季節に代表的な低気圧の経路が示され、その説明と同時に、取り上げた4つのテーマについての導入が行われる。さらに、個々のテーマの理解を助けるためのコラムが全体で19あり、理論的な説明や、一般的な概念の説明が行われる。また、付録に、1) 大気現象のスケール、2) 風の基礎、3) おろし風、があり、基礎的な部分を補強している。書名にある「風の基礎知識」は、付録にまとめられているのである。書名に従えば、本文に組み入れてしかるべき内容であるが、そうすると構成の美を崩すので、付録にまわされたのかな、と思った。

個々のテーマについては、著者自身の解析結果や他の研究者による研究の中から事例解析例を取り上げ、きわめて具体的な内容を紹介している。しかし、著者自身の興味や視点もその中に盛り込まれていて、そこが、本書の魅力になっている。たとえば、冬の空っ風の章では、「上州の空っかぜは本当に強風なのか」という問題意識で、群馬県に加えて、東京や仙台の強風の統計が比較され、東京湾岸の強風時間をもっとも長く、次は仙台という、意外な結果が紹介されている。私は、北西季節風が吹くとき、富山県で南風が卓越する場所があるという、一見、不思議な現象があることを本書で初めて知った。このテーマもそうだが、風と地形の関係を扱ったテーマが多い。

このような内容であるから、本書は、短時間で読み流しても得るところは少ないだろう。個々のテーマについて、具体的な数値を吟味し、考えながら読むのに適している。その場合、引用された論文を参照したい、ということも考えられる。改版の際には、ぜひ引用文献のリストをつけてほしい。

本書は、ひととおり気象学の勉強をして、さらに深く気象を理解したい人に向いている。いずれのテーマも大学院の修士論文のテーマとして適当なので、気象の研究を目指す学生はぜひ読んでほしい。また、気象予報士が本書を読めば、地表面付近の気象が、大気安定度や地形の関係で、実に複雑な様相を呈することを知り、地域による気象の「くせ」を知るのに大変役立つと思う。

(東京大学海洋研究所 木村龍治)